

博 士 学 位 論 文

内容の要旨および審査結果の要旨

氏名・（本籍地）	河野 一隆 （福岡県）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	乙第16号
学位授与の日付	令和2年3月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項
学位論文名	埋葬法の人類史
論文審査委員	主査 奈良大学 教授 小林 青 樹 副査 奈良大学 教授 今津 節 生 副査 奈良大学 教授 豊島 直 博

【論文内容の要旨】

先ず本論文の目次を示し、次に論文内容の要旨と成果を記載する。

第Ⅰ部 歴史認識のための方法論

第1章 はじめに 第2章 歴史認識の整理

第Ⅱ部 理論家のための作業仮説

第1章 生産革命批判

第2章 森の王

第3章 贈与の霊

第4章 犠牲・殉葬考 第5章 戦争論

第Ⅲ部 埋葬法変遷の歴史理論

第1章 歴史像の再構築

第2章 エジプトモデルと中国モデル

- 第3章 比較研究のための方法論
- 第IV部 埋葬法変遷の比較研究
 - 第1章 地域ごとの比較
 - 第2章 被葬者の社会的性格
- 第V部 装飾墓の比較研究
 - 第1章 装飾墓の展開
 - 第2章 装飾墓と洞窟壁画
- 第VI部 小結 埋葬法変遷と社会の論理
 - 第1章 初期王権と王墓
 - 第2章 初期王権の社会構造
- 第VII部 古墳文化と王権論
- 第VIII部 理論化のための考古学実践
 - 第1章 水晶製玉作の展開とその意義
 - 第2章 石製模造品の普及と祭儀の展開
 - 第3章 右片袖の思想
 - 第4章 継体大王をめぐる氏族 第5章 平群西宮古墳の被葬者
- 第IX部 結論 日本列島の王権形成
 - 第1章 黎明 初期威信財生産
 - 第2章 成立 対外契機の内旋化
 - 第3章 成熟 生産と再分配の構造化
 - 第4章 変革 2つの刺激伝播
 - 第5章 終焉 国家と国際環境
 - 第6章 領域 王権形成の展開
- 第X部 極東文明

論文の概要

本論文は、死と向き合う人類が生み出した埋葬法の変遷過程を考究するために、社会－歴史的位相と認知－表現の位相から理論的に総括し、その成果に基づいて日本の古墳時代を文明論の枠組から再構成した研究である。このような研究方法に基づいた研究はこれまでほとんどない。そこで本研究では、埋葬法を包摂する文化の構造論的分析を重視し、比較考古学研究を推進する方法論を創出し、その上で埋葬法と社会の通文化的理論の抽出と、日本を中心とする実践研究に充てている。

第I部では、死という究極の問題と向き合うために、人類はさまざまな埋葬法を生み出した点に注目している。その変遷過程の歴史的意義を見極めるために、本論は比較研究のための歴史認

識論から説き起こした。歴史を認識する主体は個人が設定する現在にあり、進化論と伝播論を整理しシュペングラー、トインビー、フランクフォート、ウォーラーステインによる世界の体系的な把握を概観して課題を総括し、理論考古学の動向に触れ埋葬法の変遷過程を比較研究するための方法論を整理した。

第Ⅱ部では、そのための歴史的生成への適用として、V.G.チャイルドが指摘した2つの人類史上の飛躍である新石器革命と都市革命について独自に検討し、文化の進化論的ではなく構造論的な把握を試みた。食料生産革命とは生産様式ではなく生活様式の変革であり、埋葬法と都市の類型把握から時間観念の変質を見出し、神聖王と神聖王権とを歴史的に位置づけた。その経済基盤として、威信財の生産と消費から生じる交換の不均衡性に基づくシステムを威信財経済と名付け、その動態を考究した。さらに王墓に付属する犠牲・殉葬を埋葬法変遷過程の中で把握し、異次元交換を支える王の象徴的身体について論じた。また国家形成要因に挙げられる戦争の歴史認識について、王権形成との関連性を機能主義的に分析した。

第Ⅲ部では、埋葬法の歴史理論を確立するためにエジプトと中国の埋葬法について比較考古学の方法論にもとづく整理を行った。まず第Ⅰ・Ⅱ部の論点を整理し、従来の国家形成論との差別化を試みた。そして神聖王権と威信財経済が生み出した文化構造論として8つの作業概念にまとめた。次いで、エジプトと中国の埋葬法を取り上げた。変遷過程に特定個人墓に前代との量・質的な飛躍が認められ複雑化の昂進過程が始まる時、埋葬施設と記念物、葬祭殿や廟が複合体化し頂点に達した時、王権の公共性が失われ埋葬法が個人的な営為と化し急速な解体を迎える時期を3つの画期とした、4つの世代関係を抽出した。

第Ⅳ部では、これを他の19地域でも比較検討した比較作業の結果、第4世代までたどる地域もあれば第1世代で中絶する地域もあった。さらに変遷過程の中に外来要素を取り込むか否かで発展型と持続型を区分し、持続型相互が衝突して他者を変質させる衝突型を加えた3類型を抽出した。さらに生業、社会や集落の統合形態、階層規制に着目し歴史的展開との関連性について論究した。埋葬法の変遷過程と書き留められた歴史の「過去を創出する」といった類似性を指摘し、埋葬法を重視する社会が枢軸時代に先行する大きく観念が飛躍する時代と位置付けた。

第Ⅴ部では、エジプトと中国を核とする装飾墓は、モチーフや描き方の差に基づき前者がヌビアとエトルリア・トラキア、後者が契丹(遼)と高句麗という周辺地域に拡散し、伝統と見なせる。またメソアメリカでも神話の図柄を採ったモチーフや文字を主要モチーフとしたものも認められる。さらに幾何学文を主とするものが東-東南アジアや地中海域に点在し、海洋交流がうかがえる。一方、石刻文様は先史ヨーロッパに多く、装飾棺ではクラブメナイ型陶棺、シドン型石棺、リキュア型石棺など地中海東部に中心がある。このような分布を旧石器時代の洞窟壁画と比較すると纏まりが見られ、王墓と同様に人類史の中で位置づけられることを見出した。

第Ⅵ部では、埋葬された王の本質、王墓の構造的特徴と成立要因、儀礼の機能について述べた。また中心化と非中心化、長距離交易、神聖王権と威信財経済、戦争と英雄叙事詩など、国家形成論で論究されてきた諸要素との整合をはかり歴史認識の理論的位置を確定した。

第Ⅶ部では、古墳時代の王権論の眼目を王と社会との関係性を全体給付の交換構造の中に位置づけ、その帰結として権力主体の生成過程を解釈する歴史認識と捉えた。東アジア世界の中で国内外の互酬制的関係を日本列島の国家形成に取り込むことによって、国民国家論を止揚する新視角を提唱した。そのために中期古墳の発見と規制論を見直し古墳時代の歴史認識における論点を整理した。

第Ⅷ部では、水晶製玉作、石製模造品、横穴式石室、古墳被葬者論から考古資料の分析と総合とを実践した。水晶製玉作では、技術革新と生産組織の分業の高度化について論じ、初期威信財生産の具体像に論究した。石製模造品は中央の権力主体による儀礼管理を通じて2度の古墳文化の伝播が中心一周辺関係の形成に寄与したと述べた。横穴式石室では伝統的に拘束力の強い埋葬施設が東アジアで共有される背景に、中国の葬送観念を地域ごとに適応させる刺激伝播の実態を論じた。古墳被葬者論は後期・終末期古墳を取り上げ、古墳築造が私的営為となった後の被葬者像について素描した。

第Ⅸ部では、日本列島の王権論を初期・盛期・末期に分けて展開し、領域論についても言及した。初期王権では初期威信財生産が根付き、威信財交換によって中心一周辺関係が形成される弥生時代中期末～古墳時代前期後半である。さまざまな威信財が階層的に保有され、顕彰され消費されるための場として、厚葬墓が登場する。倭王権は中国・朝鮮半島との結びつきを強める中で、複合的な儀礼を管理し伝播させることで地域支配を伸長させていく。盛期王権では在地首長による集団重積構造に立つ世俗王統とそれに外在化した神聖王統とが並立し、相補的に展開した古墳時代前期末～中期末である。渡来人による新技術の導入と複合は生産手段に分から難く結び付いていた生産組織を分離させ、畿内には生産拠点を集積し、地方にも拡散させた。これは威信財の複合で成り立っていた儀礼管理の構造を弛緩させ、畿内系横穴式石室の波及がそれに一層の拍車をかけた。末期王権は古墳築造がもはや公権力生成の機能を喪失し、私的営為と化して中央による規制の対象となった古墳時代後期初頭～飛鳥時代初頭である。朝鮮半島動乱に共鳴した東アジアの流動化に対応するための国際化を余儀なくされ、王権は初期国家の体制を急速に整えた。また、領域論では日本列島を17地域に分けて文化の展開を粗描し、境界の構造的性質についても論究した。

第Ⅹ部では、総括として古墳文化を国民国家論を越えた時間・空間軸で相対的に位置づけるために、「極東文明」という比較文明論的な枠組みを提唱した。環境経済論を重視した全体史的な立場に立って生態世界の広がりにも注意し、龍山大拡散と松菊里大拡散という2つの大画期が極東

地域の歴史的生成を左右することを指摘した。極東地域の神聖王権と威信財経済もこのような長期的な文脈から生成される。しかし、共同所有であった土地が労働の対価とみなされると、古墳文化は急速に衰退し、成熟した古代国家に向けての体制整備が加速する。

以上のように、本論を貫く思考実験の成果は、埋葬法に埋め込まれた異次元交換の機能を、人類史に位置付けることで拓かれた地平に立つことで、歴史的現在が認識され、歴史の誕生へと繋がることを提示したことである。

【審査の要旨】

本論文は、人類がうみだした全世界の古代文明のさまざまな埋葬法を検討対象とし、その変遷過程の歴史的意義について過去の理論的研究の緻密な検討に基づいた上で、比較考古学手法を駆使して人類史に位置付けるという画期的な論文である。また本論文は、全世界の古代文明の厚葬墓を検討対象とし、日本の古墳時代を主な対象として水晶製玉、滑石製模造品などに対して堅実な考古学的分析を加えている。さらに、横穴式石室の分析など、取り扱う考古資料が極めて多彩である。これらの河野氏による長年にわたる堅実かつ重厚な分析検討が本論で主張される歴史認識論に沿った形で整えられ、かつそれらの論点を大きく破綻させることなく、最終的な考察がまとめられており、河野氏以外には完成しえない論文であるといえる。そして、本論の結論において極東文明論として結実した検討は、本論文の成果が我が国の古墳時代研究のみならず、今後の東アジアの研究に多大な貢献を果たすことが期待できる。以上のように、本論文の完成度は高く、現在においては比類なき壮大なスケールでの新たな文明論として高く評価できる。

【最終試験結果の要旨】

河野一隆の論文博士最終試験については、審査委員会の小林青樹(主査)、今津節生(副査)、豊島直博(副査)の3名が令和2年1月15日、本学大学院棟において実施し、学位請求論文と参考論文(発表済の学術論文)および英文要旨をもとに口述試問の形で行った。本論文は研究内容の新規性・有用性・完成度等に留意して審査した。その結果、博士の学位を受けるに十分な学識を有することを確認した。

【審査結果】

審査委員会は、学位請求論文の審査結果および最終試験の結果から、本論文は博士(文学)の学位を与えるに相応しい業績と判断する。